第23回 日中戦争史研究会・議事録
2015年4月18日（土）13:00～16:30 愛知大学名古屋校舎厚生棟3階W32会議室

参加者（五十音順、敬称略）
安達満靖（愛知大学）、荒武達朗（徳島大学）、有田義弘（愛知大学大学院）、
イリナ（愛知大学大学院）、王広涛（名古屋大学大学院）、
岡崎清宜（愛知県立大学・愛知大学非常勤講師）、柏木豊美（愛知大学大学院）、
加納寛（愛知大学）、河村郁江（一般）、高明潔（愛知大学）、志賀吉修（愛知大学）、
武内剛（愛知学院大学非常勤講師）、田中周（愛知大学）、千賀新三郎（一般）、
張鴻鵬（名城大学大学院）、成瀬公策（名古屋市役所）、野口武（愛知大学）、
馬場毅（愛知大学）、本多正廣（愛知大学大学院）、丸田孝志（広島大学）、
森久男（愛知大学）　計21名

報告1：岡崎清宜（愛知県立大学・愛知大学非常勤講師）
「世界恐慌期、中国における綿糸金融の再編：長江上流域を中心に」

【質疑応答】（司会：森）
森：
今日は中国における代表的な民族産業である綿紡績業、これが中国の開港から第一次世界大戦期の民族資本の黄金時代期を経てさらに世界恐慌に至り、そして長期間の不況局面を耐え忍びながら、1935年11月の通貨改革で再び息を吹き返す状況を、長江上流域の綿糸金融を中心にして、詳しく説明して頂きました。皆さんからご意見がありましたら積極的に発言して頂きたいと思います。

荒武：
表 1 で地方銀行（省銀行、市銀行、地方民間銀行）が進出していくことが述べられていますが、四川、湖北、湖南の事例を見ていると、湖北はその傾向が見いだせない。四川には当てはまる。そして湖南の長沙にはあてはまり、常徳は多少みられるが、衡陽には見られない。そこに四川の特徴があるのではないか。それと同じく C の項目の民間大銀行について、ご発表のとおり四川には見られない。しかし湖北でみるならば、武昌のみに大きく伸びている。武昌のもう一つの特徴として B の政府系資本銀行が伸びているが、目の前の漢口では傾向が異なる。微細に見ていくと地域性が伺われると思われるので、四川の特徴、および漢口・武昌の違いをお答えいただきたい。

岡崎：
四川は明らかに他の地域と違っており、まず劉湘の国民革命軍第 21 軍がそのまま省政府

に形の上で収まっており、第21軍の独自の地方銀行、特に四川地方銀行、のちに四川省銀行に代わりますが、そういうものが各地に存在していたというのが四川の特徴です。湖北、湖南は中央化が進んでいた地域といえますが、これに対して四川は排外的で、四川としてまとまりがあり、この時期の重慶と萬県は長江に面する二大荷揚げ地でしたが団結力が強く、四川は独自の政治・経済・社会環境を有していたといえます。このことがDの省銀行が多かったことに反映されていると思います。

湖北の漢口と武昌について、武昌には1936年以降になるとどんどん支店が設けられていきます。漢口は経済の街であるのに対し、武昌は政治の街といえます。政治の街では資金需要があまりなく、武昌で集めたお金を漢口で使うということがありました。上海と蘇州も同様の関係で、蘇州で獲得した預金を上海で運営するという傾向がございました。武昌と漢口には以上の違いがあり、武昌は政治の中心地で、預金が豊富だという特色を持っていました。

荒武：

湖北は漢口だけに集中しているという傾向が如実に表れていると思います。武昌、宜昌、沙市に地方銀行は生まれていない。特に宜昌、沙市は20世紀初頭の当地域の経済の中心地ですが、何も変わっていないところが非常に面白い。ところが四川に至っては、重慶、成都が成長することは間違いないのですが、内江、自流井、濾県といった小さなところでも、地方銀行が生まれ、大きくなることが四川の面白いところと思います。

高：

四川省の地方銀行の具体的な名前をお教えください。また参考資料をみると地方の文史資料をあまり利用されていないのですが。

岡崎：

この発表は銀行とか両替商がなぜ必要になるかという話です。なぜかというと、現金で払う場合と、つけで買う場合があり、その負担を押し付けられる綿糸商人が両替商や銀行に頼ることになります。もしくは綿糸引取り商が両替商や銭荘に頼るのですが、紡績業は銀行がバックについているという明らかに違う状況があるという話です。

四川の銀行については具体的に四川地方銀行、四川省銀行があります。ただこれは軍閥の財政の為の銀行で、軍閥は戦争をするためにお金を必要とします。また文史資料をなぜ使わないのかとのお尋ねについては、重慶文史か、四川文史かに綿糸商人の史料があったと思いますので、是非調べ直します。

丸田：

四川の地方銀行がかなり伸びていることに関して、これは国民政府が日本との全面戦争

を予期して内陸建設を進め、奥地の経済整備を試みていた事と関係はあるのでしょうか。

岡崎：
　おそらく四川は面従腹背であったかと思います。どの資料をみても蒋介石が言っていることに劉湘は従っているが、劉の秘書長であった鄧漢祥が実は共産党のスパイであったと言われています。
　また、四川地方銀行は大量に紙幣を乱発して潰れてしまいますが、その後継が四川省銀行になります。四川省銀行は当然軍閥銀行ですが、四川経済をある程度コントロールするために必要なお金を発行したいと中央に要求します。一角、二角の補幣券を発行したいと申請しますが、中央は一千万元申請されたところを百万元しか許しませんでした。このように実は中央は四川省政府を信頼していない向きがございます。この点は今後も追求していきたいと考えます。

荒武：
　現金決済という言葉を使われているが、現金とは、銀、銭、手形の割合はいかがか。

岡崎：
　その割合ははっきりしません。基本的に「ファイナリティがある」という言い方をしますが銀元一択です。貨幣条例で銀行券は交換ができるからファイナリティがないという判例が出ています。したがって最終的には銀元です。銀元と交換できる範囲で手形、小切手、銀行券が可能となってきます。

荒武：
　現金決済へと移行していく流れはすごく面白い。現金決済ができない理由の一つは、手元の元銀が中国の金融機関に少なかったのではないか。そういう要因を考えたときに、この手持ちの貨幣が増えていく中で、現金決済というのが可能になっていった状況が考えられないでしょうか。

岡崎：
　十分考えられることです。といいますのも漢口、広州、上海、天津といった銀があるところから現金決済が始まってくるからです。

森：
　大恐慌が深まっていく中で、アメリカの銀買上法によって中国の銀が流出していきますね。そうすると銀流通の中国は現金決済が困難になるという状況にはならないのですか。

岡崎：
　なります。このあたりから中央銀行券や中国銀行券が兌換もされずに、北の方から、銀行券をそのままの形で受け取るという事が始まっていきます。これは 1935 年 7 月、8 月の幣制改革の直前の話ですが、現金決済が困難になるためにかわりに銀行券も、という流れが出てきています。

森：
　幣制改革によって法幣が銀流通に代替していったことはよく言われていますが、それ以前にも銀行券の発行があったわけですね。そうすると前段階でそれが下準備になっているのでしょうか。

岡崎：
　なっています。四行貯蓄会という銀行が中南銀行券を出していますが、その兌換の際に銀が出せないので、かわりに中央銀行券や中国銀行券を利用する状態になっています。これが 1935 年の 7 月、8 月の段階です。それこそ 1935 年の 6 月に上海で金融恐慌が生じて両替商が崩壊寸前になり、その直後にも漢口で金融恐慌が起きていますので、これらに相関関係はあると思います。

森：
　四川省で軍閥が軍費を調達するために銀行券を増発して民衆を苦しめたということはあるでしょう。東北軍閥でも同じようなメカニズムが働いていますが、しかし東北における紙幣の価値を裏打ちするものとして、大豆の海外への大量輸出という物的基礎があったわけですね。四川省でも基礎がないと紙幣は流通しないですが、何があったのでしょうか。

岡崎：
　四川省はアヘンです。ただ四川省の場合は経常収支の黒字が上海に置いてあり、この黒字が戻ってきません。もちろん軍閥は紙幣を乱発する際に、銀が欲しいため様々な手を使って上海から銀を運び入れようと試みますが失敗します。国民党政府中央と四川省の政治的な鍔迫り合いあるのですが、考えてみれば軍閥銀行の力を強めることは国民政府中央としては面白くないわけです。ですから本来的に言えばアヘンがありますし、桐油もあるのですが、四川には黒字が戻ってこない状況があります。

森：
　それは為替管理が有効に行われていないからで、つまり域外の物資流通の収支の黒字が一種の在外資産として留まってしまっている。アヘンも密輸の部分が多いはずで、地域的にみて黒字のはずだが、その黒字の部分が四川の域外で貯蓄されてしまうということでし

ょうか。

岡崎：
　そうですね。四川の引取商はアヘン、桐油、ザーサイを上海に持ち込んで、代わりに綿糸、ガソリン、雑貨を持ち帰ります。特に四川が混乱していると、上海に置いておいて、一番為替が有利な時期に持ち帰ろうとします。上海、南京、重慶は遠く離れていますし、蒋介石と劉湘は一致しているように見えてそうではないので、為替管理が全くできなかった部分があると思います。たしか四川商人たちは、上海に 1500 万両か 1500 万元かの預金を持っていたという資料がありますが、これらを四川から手を伸ばして管理する事は無理であったと思います。

森：
　四川軍閥自身が、上海に貯金を置いておくという行動をとっているのではないか。

岡崎：
　とっております。上海で企業を経営していたりする者もいます。

森：
　地方軍閥が貨幣価値を下落させるだけだと、紙幣の通用力がなくなって利用されなくなってしまうのでそれを補う措置があるはずです。

岡崎：
　そうです。銀を利用して裏打ちさせようとする措置は、四川地方銀行の時代にやるのですが、なにせ漢口とかで船積みの銀を蒋介石などが止めてしまいます。結局のところ掃共戦をやっていく過程で、最終的に 1934 年 11 月に劉湘が初めて蒋介石に謁見するために重慶を離れて南京に向かって、その結果交渉がうまくいって、四川は中央に服属するという話になってきます。そういう形でなかなか止めたり止めなかったり、鍔迫り合いがあり、しかも劉湘は蒋介石が支援してくれないから俺は止めると辞職表明をしたりしています。劉も蒋どちらも食えない。その狭間に陥ってしまうのが四川地方銀行券を使わされていた人々で、一連のやりとりは劇的なものがあって面白いです。

森：
　新しい物資の出回り期には新しい通貨を発行して、貨幣価値を維持しますが、時間が経過すると急激に下落して価値がなくなる。それを何回も繰り返す。これは例えば張作霖がしょっちゅう行っていたことです。

岡崎：
　四川省だと 3 月と 4 月がアヘンと生糸、9 月と 10 月がお米と綿花がきますので、大体この二つが主要な出回り期です。ただ 1 月と 2 月に揚子江の水が枯れてしまい、全然運べなくなって商売ができなくなりますが、それ以外はだいたい動いています。

森：
　長江上流域、中流域はどのあたりを指しますか。

岡崎：
　上流域は四川と湖南・湖北も含めて考えています。中流域は広西、安徽のあたりを考えています。

森：
　どこかに上流域の定義を書いておかないと。例えば四川省よりも奥の場合を上流とする場合もありますので。

森：
　他に発言する方がおられないようでしたら、最初の報告は以上にして、少し休憩時間をとりたいと思います。

報告2：荒武達朗（徳島大学総合科学部准教授）
「1945 年－48 年山東省濱海区　戦火の土地改革：“総力戦”体制の構築に向けて」

【質疑応答】（司会：森）
森：
　今日は山東省濱海区における抗戦勝利後の土地改革について、いわば当時の同時代人の目線、細かい具体的な農村の実際の動きの中で、従来知られていなかった興味深い事例をたくさん紹介してもらいました。主に『濱海農村』という新聞を通じて具体的な事例を中心に紹介いただき、あたかも眼前で起きている事実のように、当時の様相が豊かなイメージとして広がりました。今日の報告について意見のある方は積極的に発言してください。

成瀬：
　興味深いご報告ありがとうございます。単純な質問ですが『濱海農村』はどのような新聞であったのか、具体的に編集者、読者層、部数などの情報を伺いたいです。

荒武：

この『濱海農村』の任務は、各地の工作・運動で得たものを再び各地にフィードバックする事でした。発行部数はよくわからないのですが、新聞の中に例えば「〇〇公署」と書かれており、これは宛名です。その村の役所に何部か送る。そしてまず幹部が読まなくてはいけない。同時に識字班というのがあって、貧しい人たちに文字を教える教材としての役割もあり、そのついでに各地で生じた事例を伝えていました。編集は中国共産党濱海区専署の下に位置する濱海農村編集部という党が完全に掌握している集団です。

成瀬：

ご報告の後半を伺うと、共産党の機関紙にもかかわらず、かなりリアルに共産党が隠したいことが一杯でてくるのはなぜでしょうか。

荒武：

それがこの時期の異常性です。人々の好きにさせて、あの村はこうやっている、この村はこうやっていると熱狂状態を生み出していくことになります。確かに共産党の政策を上から教えていくのも大事ですが、仲間の経験をいったん上に吸い上げて、そしてそれを下にフィードバックしていく事も『濱海農村』の役目でした。

馬場：

大変面白いお話でした。いくつか質問と意見があります。最初の1ページのところで、1937年冬の段階で共産党と日本軍と国民党の「三つ巴の戦況」とされていますが、この状況はもっと後だと思います。1940年12月の段階で5万の八路軍がでてきますが、1937年冬の段階は圧倒的に日本軍と国民党軍の闘いの状況でした。

それから濱海区は山東分局があったと思います。そこで軍の移動の問題ですが、日中戦争が終わった後の軍の移動・変遷がこの地域に対して影響があったか否かを伺いたいです。

さらに共産党の軍隊には主力軍、地方軍、民兵の三種類があります。総力戦はそれらを全部主力軍に吸収してやっている段階です。日本の治安強化運動の痛手を回復して以降、つまり1943年の秋以降の状況は、参軍の際にまず民兵になって、それを地方軍あるいは主力軍に入れる。つまり主力軍にそのまま持っていかないという事例が多いです。一方で今回のご報告の対象時期は、最初から主力軍に参軍させているのか、参軍させる際は民兵なのか、地方軍なのか、主力軍なのかを伺いたいです。

また均分の問題についてです。今日のお話を聞いていて、要するに今まで土地改革をやったから生産力が上がったといわれるけれども、実際には均分によってかなりダメージを与えているという、具体的な例のお話かと思います。

最後に、濱海は山東の南の方で、割合に平地の地域ですね。したがって比較的南に近く、そういう意味でも地域的に夏井さんや笹川さんの間くらいかなと思います。

荒武：

まず軍の移動について、抗日戦争と日中戦争の際にはこの地域が軍事的な中心地でしたので兵力が集中していましたが、戦後は北方へと抽出されていくことになります。その後、当地域の人々の間には主力を待つ思想が次第に蔓延していく事になります。つまり主力軍が到来してから反抗するということです。軍事的には良くて地方軍、ほとんどが民兵の世界になるわけです。敵の機関銃に対して自作の大砲で戦う、というまさに民兵の世界です。したがって今回の報告の段階では、隣の地域で生じている戦闘に民兵として加わり、民兵でありながら同時に担架兵になったりもしています。本当の総力戦体制は、今回の報告が扱う後の時期でして、淮海戦役が始まる頃になると、当地域は後方地域へと組み込まれていくことになります。

馬場先生から最初にご指摘いただいた点については、1939年に共産党軍はこの地域へ侵攻しました。また均分思想についても馬場先生がまとめてくださったとおりです。人々は均分思想を持っておりましたが、それに従うと農業生産を破壊していく一つの原動力になってしまう、という問題意識を私は持っております。最後に魯南については、山東省の南東部といえばより正確であったと思います。

丸田：

大変興味深いご報告ありがとうございました。『濱海農村』は基層幹部向けの内部のもので、より広いマスメディア的な宣伝の性格を持つ新聞ではないということですね。したがって内部の事情がかなり赤裸々に出てくるし、フィードバックもされる。その内容、言葉は平易に書かれているのでしょうか。

荒武：

丸田先生の仰るとおり基層幹部向けで、基本的には内部向きですが、教材として識字班に利用されるものもあります。そういう文章はとても平易です。

丸田：

『濱海農村』に比べて『大衆日報』はもう少しグレードが高く、より統一戦線向けで、一般的な政権の性格を代表するものと理解してよいでしょうか。

荒武：

『濱海農村』は『大衆日報』よりも一段下のレベルの地方版新聞と言えます。

丸田：

私は太行区を研究した際に『太行日報』をみましたが、これよりも下に『新大衆』とい

う新聞があります。これが『濱海農村』と似ており、農村の色々な事情がより平易に、基層幹部向けに書かれており、フィードバックもあります。加えて結婚・離婚問題をはじめとする人生相談もあり、非常に面白い材料です。一方で冀魯豫を研究した際には『冀魯豫日報』はありますが、その下の新聞を見つけることができませんでした。ただし『冀魯豫日報』もこの時期になるとフィードバックが結構あるのです。地方の極端な例が取り上げられ、その矛盾や政策の是正を指摘したりしています。おそらく山東も同じでしょうが、内戦のるつぼの中でぐちゃぐちゃになっています。したがって『大衆日報』でも似たような状況が出てきて、『大衆日報』と『濱海農村』を比べていくとまた意味のある比較や、目線の違う発見が出てくるのではないかと思います。

荒武：

『大衆日報』との比較については、仰るとおりと思います。

丸田：

1947年12月頃に、地主の扱いが乱殺乱打から投敵しなければ生存を許す方向に変容してくるとの事ですが、私が冀魯豫を研究した際に思ったのは、10ページの67番の「紅黒点運動」とも関係しますが、要するに身分の可変性です。悪い奴、脛に傷を持つ者、出身が悪い人々は参軍や労働奉仕をしなくてはならない。頑張れば僅かずつ点数が上がって、銃殺から少しずつ生存を許されていくという流動性を利用しています。それによってこそ大きな動きを作り出すことができる。貧しい者のも傍観することは許されず、積極的に参加せねばならない。必死になって私はこの政権のために心を入れて頑張ります、という事を示さねばならない状況になる。中国社会は流動的に揺れているがゆえに、これを利用してうねりを作り出し、このうねりに皆が乗っかって生き延びなければならない状況といえます。

荒武：

地主とそれ以外の人々の間の流動性は、確かに中国社会の特徴としてあるのですが、私はこの『濱海農村』で、出身や生まれによって敵は敵であると決めつける印象を持ちました。もしかするとそれが1947年における濱海区の一つの特徴かもしれませんが、ただし流動性について十分に考察したわけでありませんので、今後検討したいと思います。

丸田：

貧しい人間も動員するし、今までの幹部すらも打倒されるような誰が敵か味方かわからないほど混乱した状況で、貧しい者と地主という形で口では機械的に分けながら、実際に行っている事は混乱し、それを政策として奨励しています。この点をもう少しみれば面白いと感じました。

それから均分均産について、田中恭子先生の著作では農民が均分を求めた事が伺える資

料は出てこなかったと書かれています。しかし共産党は自らの政策の必要上から均分を奨励する。私もこのように理解をしています。政策的に均分を誘導してそれに引っ張られる人々もいたかもしれませんが、均分を求める人々は大きな層でいなかったのではないかとの印象を持ちました。荒武先生が「農民が均分均産を求めた」という根拠はどこにあるのでしょうか。

荒武：
　均分は大きな問題で、本来まっとうな農民であれば均分を求めず、自分の土地を愛し、土地の契約書を絶対に離そうとしません。ただある種の世界、秘密結社などの思想の中で時々均分の思想が芽吹くところがあります。笹川裕史先生が四川の事例で、共産党の支配が確立された一因として、格差社会を一度リセットするための土地改革を指摘されています。これに対して山田賢先生は『移住民の秩序』の中で、人々は一度リセットしたいという願望を持っており、これには昔から存在する四川農民の秘密結社の考え方が関係するという仮説を出されています。丸田先生の仰ることは分かりますが、この点に一縷の望みをかけてもう少し研究したいと考えます。

丸田：
　私が思うのは、流動した人々を受け止める際に出てくる説得的な政治イデオロギーであって、現地の人々の均分ではないということです。

荒武：
　実際に現れてきたのは完全に共産党が作り出した均分ですので、農民のエートスとは関係がないことは間違いありません。

丸田：
　結局昔は土地改革をすれば封建的生産体系が正され、生産力が高まって、皆幸せになるというストーリーが内戦を勝利に導きました。しかし、やる気を出した農民が共産党に協力して何千年の封建社会がひっくり返ったというストーリーが、今回の報告では成り立たちません。日中戦争期の最後になって共産党が優位を確立する時点で地主が打倒され、比較的平準化された社会ができます。しかし結局その後の内戦によって、共産党は今まで作り上げてきた日中戦争期の成果を自ら破壊してしまいます。抗日戦争期の成果がぐちゃぐちゃになってしまったという絶望的なストーリーには、救いも何もない印象を受けますがこの点どのように思われるでしょうか。

荒武：
　抗日戦争期の方がまだましという印象を受けます。それほどに内戦期は社会を大きく変

えてしまいました。確かに日本軍は多くの人を殺し、多くの悪いことをしたのは事実ですが、社会体制までは破壊できなかった。しかし内戦期の混乱の中では、かつて存在していた秩序が全くひっくり返ってしまいました。今まで正しいと思われてきた地域社会のリーダーたちがここで完全に姿を消したことに、暗澹たる思いがいたします。

森：
　馬場先生と丸田先生から専門性の高い質問が出されました。それ以外にも気軽な形で、意見のある方は自由に発表して頂きたいと思います。
　私が昔読んだ中国革命史の本に、国共内戦期に華北農村で土地革命が行われて、土地を求める貧しい農民たちが非常に感激して、喜んで八路軍なり人民解放軍に参加して、これが国民党に対する軍事的勝利の大きな理由であったと書かれてありました。ただし今日の報告では、貧しい農民の中でも土地を求める農民と、土地があっても仕方ない社会からあぶれたアウトローのような農民がいて、そのアウトローが人民解放軍の兵力の中心となっていったと結論付けても良いのですか。

荒武：
　いえ。数としては少ないと思います。主流は農民の子弟兵団です。しかし社会を改革していく上で、今まで土地改革でのけ者にした者も巻き込んでいった点に意味があると思います。90%を 100%にしていったというのが私のイメージです。

森：
　土地を分け与えられることを楽しみにして革命運動に参加した人は、自分の土地を郷里に残して正規軍に参加する事にいかなるメリットがあるのですか。

荒武：
　そういう人たちを擁護するシステムを作り上げることも、総力戦体制を作る上でとても大事なことでした。

森：
　要するに国共内戦期の山東省においては、分配すべき土地のないところで無理やり土地改革を行ってしまい、大きな悲劇を生みだした。この点は非常に納得できます。華北一帯や旧満州国の地域は全て同様であったのではないかと思いますがいかがですか。

荒武：
　全くその通りです。華北が自作農主体であることは民国期の調査が既に明らかにしており、そのような地で土地改革をどうやって実施するのかということです。

森：
　地主の多い南方では、土地改革は中止してしまったわけですね。

丸田：
　内戦期が終わってから、中華人民共和国期になってからです。

森：
　今日の報告の内容は、具体的な事例として一つのイメージを与えてくれたという意味で、非常に興味深い報告であったと私は感じました。

張：
　共産党の土地革命と孫文の民生革命には、どのような根本的な違いがあるでしょうか。

荒武：
　とても大きな問題です。理念としては耕作する者が土地を持つという点で共通していますが、孫中山は均分に全く言及していません。より大事な問題は、実際に政策が行われたか否かです。共産党の見解では、国民党の政策はほとんど実行されなかったとされていますが、1930 年代には国民政府の土地政策はかなり進んでいた事が最近明らかになっています。もちろん地主中心で、地主は土地を持ったままですが、小作料を引き下げることで成功を収めつつあったといえます。国民党は土地の分配ではなくて、小作料引き下げを中心に政策を進めていたといえます。

高：
　たいへん意義深いご報告でした。5 頁の下から 7 行目に「全国的左傾の拡散」とありますが、内モンゴルでは逆の状況です。内モンゴル自治政府成立後に、内モンゴルの牧畜地域では、牧畜民の財産と家畜を守り、牧畜民の間に階級を作らないという政策が採られました。同じ時代においても中国はかなり広いため、中国現代史もかなり多元的であったといえます。

荒武：
　ありがとうございました。「全国的」と書きましたが、全国ではなく、華北の支配地域ということになりますね。

成瀬：
　国共内戦で最終的に共産党が勝利した理由を、先生のご研究からどのようにお考えでし

ょうか。もちろん山東の状況のみからは判断できないと思いますが、今日のお話では国民党が勝利しても不思議でなかったという印象を受けました。

荒武：
　私もどうして共産党が勝利したのだろうか、というのが正直な感想です。私のフィールドの山東省だけを見る限りでは、勝つ要因を見出せません。

王：
　まず個人的な感想ですが、私はまさにこの山東省の濱海区の出身です。私の曾祖母は一昨日 106 歳で亡くなりましたが元共産党員でした。共産党と日本軍のどちらが悪いかを考えた際に、彼女から聞いた話から判断すると、お互い様という印象もあります。
　次に質問ですが、日中戦争終了後に中国共産党の解放区における土地改革が始まりましたが、濱海区の事例を見た場合に、どれほどの中央からの関与があったのでしょうか。上からの原則と下の行動にすれ違いはなかったのでしょうか。また中華人民共和国成立後の土地改革や三反五反運動は政府主導であったと思いますが、この戦前と戦後の比較についてはどのようにお考えでしょうか。

荒武：
　まず中央の政策は必ず上から伝わってきます。日中戦争の時はそうでないこともありました。連絡ができないために、各地域が独立して行うことがありました。一方で内戦期になると基本的に連絡が行くので、上の政策が伝わります。しかし、それを受けた各地域が暴走する傾向がありました。実はこの傾向は、大躍進などのかなり後まで見られます。中華人民共和国建国後の 1950 年、1951 年頃に反革命を鎮圧していくその運動の中で、ほぼ完全に中央が統御できるようになったと考えます。

森：
　他に発言がなければ、本日の研究会はこれで終了いたします。次回の日程は 6 月 20 日（土）です。

以上